

---

# 魔導師の林檎

ZOY

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導師の林檎

### 【Nコード】

N0056Z

### 【作者名】

ZOY

### 【あらすじ】

ある魔導師と林檎が好きな女の子の話。悲しくて優しい恋の話。

## 第一話

「ねえ、おとうさま。わたしまだ眠たくないわ」

布団の端から顔をのぞかせ、駄々をこねる少女に父は苦笑した。  
枕の上、ふわりと広がった少女の栗色の髪を大きな手が優しくなでる。

「それなら、ひとつだけ。お話をしようか」

「どんなお話？」

年を重ねることに母親に似ていく少女を見て、父はゆっくりと視線を落とした。

「ある魔導師と林檎が好きな女の子の話」

「恋のお話？」

「そう、恋の話。悲しくて優しい恋の話」

\* \* \* \*

くるり、くるり、くるり。

あざやかなドレスの裾が音楽にあわせて弧を描く。

張り付けられた笑顔、お手本通りの社交辞令ばかりがあふれる舞踏会の夜。

そんな王族の日常を背にルージュは眠る少年を見つめていた。  
誰もいない薄暗い中庭。

その片隅にある立派な林檎の樹に身をあずけ、少年はぴくりもと動かない。

ただただ、瞳を閉ざし座していた。

「ねえ、あなた。こんな所でなにしているの？」

王宮の中の騒音とは対照的に静寂に支配された中庭にルージュの声はほどよく響いた。

しかしそれつきり、辺りは再び静けさに包まれた。

手にしていた籠をそつと端に置き、腰を折って少年の顔を覗き込んでみるがやはり返事はない。

足元をふわり、夜風が通り過ぎていく。

「ねえ、こんな所で寝ていたら風邪をひきますよ」

もう一度声をかけ反応が無いのを確認すると、ルージュは少年をまじまじと観察した。

透き通るように白い肌に白銀の髪、整った顔立ち。

まるで雪の妖精みたい、ルージュは誰にも聞こえぬ呟きを落とした。ふれたら消えてしまいそう、とも。

月夜に照らされた美しい白銀の髪にルージュはそつと手を伸ばした。儚い彼を確認するように。消えてしまわぬように。

しかしルージュの指が彼に触れることはなかった。

寝ていたはずの少年がルージュの手首を捕えたからだ。

少年はゆっくり目を開くと、鋭い視線をルージュに投げた。

そして高揚のない声で一言だけ呟いた。誰だ、と。

「こんばんは妖精>フェータくさん、わたしはルージュ。ルージュ・クライネファア」

ルージュはにつこり笑って答えてみせた。

少年が眉をよせたのにも気づかぬふりをして。

「……フェータ？」

「あなたのお名前知らないから。妖精>フェータくってあなたにぴったりでしょう？」

少年は不機嫌さを隠そうともせず、さらに深く眉間にしわを刻む。

ルージュはその様子を不思議そうにみつめていた。

ルージュのまわりには彼のように感情をそのまま顔に出す人間などいなかったからだ。

作り笑いに、あいそう笑い。王城での生活には偽物ばかりがころがっていた。

「……ジゼル・シルフィード」

夜風とともに告げられた名にルージュは瞳をまたたかせた。

「ジゼルさん、それがあなたのお名前？ 素敵です、とても」

もう一度。その名を口にしてみる。ジセル。ジゼル・シルフォード。

シルフォード。それは帝国の名。

大海の向こうにある大国の名。

光の女神に守られし土地。

シルフォード。その名をラストネームにもつ彼はきつと。

そこまで考えてルージュは頭を振った。

少しだけ肌寒さの残るこの凜とした夜には、王宮での日常全てが無粋に思えた。

「そうだね。ねえ、ジゼルさんは林檎は好きですか？」

突然話題を変えたルージュに、彼は少しだけ片眉をあげた。

そんな彼の様子を気にすることなく、ルージュは横に置いてあった籠の中身をこそごと取り出した。

手のひらの上にはひとつ、真っ赤な林檎。

林檎、好きですか？ともう一度問えば、ああという短い返事が返ってくる。

肯定の意を確認すると、ルージュはそつと彼の手に林檎を握らせた。

「ならばどうぞ、お召し上がりになってください。ジゼルさんは少しだけ栄養が偏った生活をしているように思えます。林檎は万能薬と昔から言われていて、特に食生活に問題がある方にはおすすめです」

彼はちらりと視線を横に流す。その先には、今なお繰り広げられる舞踏会の光。

そして、あの贅沢な料理に飽きたら、と言った。

「是非そうしてください。わたしこれでも王宮に仕える緑>グリューン<の魔術師なんですよ」

自慢げに胸を張るルージュに、彼は苦笑した。

「緑>グリーン<？ 治癒の魔術師に勧められたとなると食べないわけにはいかないな」

「そうです。緑を纏う者の助言です。きちんと全部食べて下さいね」

彼がわかったと頷けば、ルージユは満足そうに笑った。

彼は手の中の林檎に目線を落とし、林檎をひと撫でしてから呟いた。ぼつりと、本当に小さな声で、君は普通だな、と。

ルージユの耳にはその小さな一言がしつかり届いていたようで、確かにわたしは絶世の美女ではないしお料理も飛びぬけてできるわけじゃないけど女性に対して失礼です、と言いながら頬をふくらませた。

彼は一瞬 目を開いた。ルージユが、普通と言う言葉を彼の意図した事とは違う意味でとらえたからだ。だがすぐに、彼はふつと噴き出した。

「謝る」

そう言ってほほ笑んだ彼はまさにフェアタのように美しかった。あの夜の彼をルージユは忘れない。ずっと、ずっと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0056z/>

---

魔導師の林檎

2011年11月30日15時53分発行